

鷹陵史学会第29回年次研究大会

公開講演会

「二〇二〇年代の西洋中世史を展望する」の趣旨

近年の西洋中世史研究には、三つの傾向が顕著であった。これらの傾向は互いに関連しあいながら、二一世紀最初の二〇年間の西洋中世史研究を特徴づけてきた。その傾向とは、第一に「越境」の進展である。方法論的な面では、長期的な傾向として国際的・学際的な研究が促進されてきた。西洋中世史研究者がヨーロッパ各地で史資料を収集するだけでなく、自身の研究成果を国際的にも発信し、欧米の研究者との交流を恒常的に持つことも可能となった。また隣接する学問領域との交流や融合も、共同研究という形で盛んになった。国内外の研究者同士で提携し、研究の組織化を行うことで、各自の専門領域を超えた連携も図られるようになったのである。現在では、他分野の研究者との共同研究は研究方法として定着し、その成果が個人研究にも好影響を与えるようになってきている。一方、概念的な面では、地域史研究が興隆し、既存の固定化した枠組み（国家）を横断的視座から読み替える試みも行われた。その結果、様々な文化や人流の密な地域をひとつの歴史的な空間として理解しようとする動きが活発化し、その視点から全体的、もしくは射程の長い分析や比較の可能性が提起されてきている。

第二の傾向としては、「史料論」をあげることができる。一九九〇年代以降、西洋中世史研究では、分析対象となる史料の幅の拡大がみられた。これは研究者に対し、何を史料とすべきかという問題を提起するものであった。現在は、原史料や未刊行史料を用いた実証的かつ精緻な研究が増加し、またそれらの徹底した読み込みで分析対象に肉薄した結果、従来であれば取り上げられにくく、また「周辺」とされてきたようなテーマや地域が注目を集めた。さら

には隣接諸学との交流や電子化史料の公開により、新しい史料を用いた研究の可能性も拡大している。

第三には、「研究意義の再検討」があげられる。特に二〇〇〇年代以降、西洋中世史ないしは歴史学自体を問い直すような書籍や著作が刊行され、研究のあり方についての問題提起が盛んになされるようになった。これは、高等学校での「歴史総合」科目の設置により、西洋中世史の魅力を伝える機会の減少が危惧されているからかもしれない。そのため、西洋中世史への関心を喚起するための取り組みとして、一般読者の視線を意識し、アカデミックな世界と、教育や社会とをつなぐことを通じて、研究の裾野を広げようとする努力も精力的に行われている。その一方で、若手研究者問題のような、学界全体に関わる研究者養成の構造的欠陥も懸念されている。また二一世紀に入り、コンピュータとインターネット技術の発達は、西洋中世史研究者に対して、各々が直視せざるを得ない、研究の新しい条件や思考方法の大幅な変革を突きつけた。その結果、西洋中世史を研究するうえでの研究意義が今、再び脚光を浴びる形となっているのである。

これら三つの傾向が現れた背景には、一九九〇―二〇一〇年代における研究環境の変化があった。「失われた三〇年」と呼ばれる当該期は、それ以前と比した経済の長期的低迷により、相対的に人文・社会諸科学研究の低予算化が進行した。資本の「選択と集中」の結果、競争的資金（大規模科研等）への応募・獲得が重視されるようになり、共同研究や国際的・学際的研究の進展にもその影響が現れた。また電子技術の発達は、史料の電子化・データベース化や、メール・SNSによる研究者の相互連携、研究成果のリポジトリ化などを促進し、国際的な協業を簡便化した（特に新型コロナウイルス禍のもとでは、対面での協業が困難になるため、今後の数年でこの傾向は研究上、より決定的なものになると思われる）。この意味で一九九〇―二〇一〇年代は、西洋中世史研究者にとって、研究環境の激変に対応しようとする過渡的時期（環境への順応と対策遅れの時期）であった。この新たな研究環境への適応という点において、西洋中世史研究が抱える課題は歴史学全体の課題でもあるといえる。

しかし同時に、上記が傾向を生み出す外的要因だったとすれば、より強い動因となる内在的要因は、現実を糧として、研究者の胸懐よりもたらされた。一九九〇—二〇一〇年代には、西洋中世史研究者の歴史認識を揺さぶる様な出来事があった。例えば中世ヨーロッパ世界を想起させる、冷戦後のEUの発足と拡大、そしてその危機があげられる。西洋中世史研究者は、一九九〇—二〇一〇年代にリアルタイムで変化していくヨーロッパ統合という壮大な歴史の実験を、ヨーロッパの内外から観察し、経験し、考究することで、新たな課題や方法論を主体的に発見してきた。つまり、西洋中世史研究者はこうした現実のうねりを受け、その刺激を原動力に換えて、自身の研究のパラダイムを大きく転換させてきたのであり、そしてそれが先の三つの傾向を現在も、以前よりもより重要な研究潮流へと押し上げ続けている。

以上を踏まえ、今回の特集では、二〇二〇年代の西洋中世史研究の行方を展望する。それはこの特集を、過渡期を終えて新しい研究環境と認識の枠組みがより自明視されることになるであろう二〇二〇年代において、西洋中世史なしいしは歴史学の研究・教育者として、我々がどう生きていくかという問いについて議論する契機としたいからである。そのため本特集では、一九九〇—二〇一〇年代に先の三つの傾向を牽引し、西洋中世史の研究・教育の両面に多大な貢献をなしてきた研究者三名と、二〇二〇年代に西洋中世史の研究・教育の主軸となる世代の研究者一名に論稿執筆を依頼した。まず冒頭の江川論文は本特集における総論の役割を担っている。この総論を受けて、続く朝治・服部両論文では各論として、それぞれの分野における最新の研究動向の紹介と研究実践とが示され、それを通じて二〇二〇年代への展望が開かれる。最後に特集の総括として、佐藤公美氏により、講演会当日のコメントをベースに、三論文についての解説と批評が行われ、そのうえで、これからの日本の西洋史学を担う、将来の研究者たちに向けた提言が述べられている。

「回顧はできても展望は利かぬ」。これはかつて西洋史学者の間で日々交わされた嘆きの言葉であった。現在の

我々も、十年先どころか次年のことすら見えない研究状況に置かれている。しかし、そのような今だからこそ、「展望は利かない」と再び嘆くのではなく、敢えて我々が生きる二〇二〇年代の研究を展望し、無理を承知で未来を提起していくことが、次代に向けたメッセージとして必要になるのではなからうか。その意味でも今回の特集は、二〇二〇年代に活躍するあらゆる世代の研究者に、躍然たる議論の基因を提供するものである。

(水田大紀)